白金キャンパスの大きなイチョウが色づくころ、絵を描きに訪れる人たちをよく見かける。澄んだ青空に尖塔を突き上げるように立つチャペル、明治の息吹を感じさせる記念館やインブリー館は、きっと絵心を誘うに違いない。明治学院は来年、ヘボン塾開設から数えて百五十年という輝かしい記念の年を迎える。学院の長い歴史を見続けてきたこれらの館は、これからもこのキャンパスに学ぶ若者たちの心を慰め、また励ましてくれることであろう。

★　★　★

サラリーマン生活を四十数年間過ごしてきたが、若い時代に高度成長期を過ごしたわれわれの年代には、いわゆる「仕事人間」が多く、気の利いた趣味をもつ人が少ないように思う。いろいろなアンケートの「趣味」の欄には、多くの人が「ゴルフ」「読書」と書いているが、これほど定番化すると「趣味」とは言いがたい。現役を隠退してからは時間もできたのだろうか、最近会うと、「絵を描いている」とか「料理を始めた」「写真に凝っている」「町内のウォーキング会に入った」など、多方面にわたって忙しそうに趣味の世界を楽しんでいる方が多い。けっこうなことである。

そういう自分も、五十五歳のときに謡曲を始めた。それまで、謡曲を謡ったことはおろか、聞くことさえなかったし、ましてや能楽など全く無縁の世界であった。大学時代から謡曲をやっている同期の友人から、「初めての人を入れて謡の会を始めたいが参加しないか」との誘いに乗ったのが今から十七年前のことになる。

当初集まった十人ほどの仲間の中には、私と同様全くの初心者が半数ほどいた。学生時代に謡曲部に入りある程度の実績をもつ人たちも、それまでの数十年間、謡曲の世界から離れた人が多かったこともあり、全くの初心者が習う「鶴亀」からのレッスンである。さらに、当初メンバーは、全員が昭和三十八年に大学を卒業した同期生であった。実は、教えていただく先生の竹内師範も同期生である。そんな雰囲気

五十五歳からの手習い

青本　健作
●明治学院理事長

であったから、私も抵抗なく入り込めたのかもしれない。

当時はみんな（先生も含め）、まだ社会的には現役であり、職場ではそれなりに重要ポストを占める面々であるから、夜の時間帯はみんなが集まりにくい。そこで練習は月二回、木曜日早朝ということになり、おのずとその会は「木曜会」と呼ばれるようになった。一時間余りの時間であるが、半分は時事放談などに費やしていたから、実際に謡の練習をしているのは四十分ぐらいのものだったろう。それでも三、四年たつと、とにかく習った曲目はそれなりに増えるし、変な自信もついてくる。成果を人に聞かせたくなる。絵でも歌でもそうであるが、ある時期から、人に見せたい、聞かせたいと思うようになるのはどの趣味でも同じではないかと思う。

最初は、ささやかに女房や子どもらを犠牲にして聞かせていたが、やがて、厚顔無恥と言おうか、第三者を巻き込んで自演会をやるようになった。今では、渋谷のセルリアンタワーの能楽堂を借り切っての公演会（もちろん無料かつ昼飯つき）である。参加する仲間も三十名近くまでになり、出し物のレパートリーも増えた。来年春には十一回目を迎える。書棚に並べた謡曲本を眺めると、この間に百曲以上やったことになるが、あらためて謡ってみると、どの曲もそれなりの雰囲気と難しさをもっていることを感じる。今は「卒都婆小町」をやらせてもらっている。

謡曲を趣味にしている人はかなり多い。十数年もやっていると、しだいに横の連絡もとれてくる。同じ大学の卒業生が集まって、春秋二回の「東大観世ＯＢ会」を開催し、毎年年末には現役の学生との合同で「東大観世会」をやっている。また一年ほど前に、さる先輩の紹介で学士会の謡曲を楽しむ会「村雨会」にも入会させていただいた。旧制七大学の卒業生の好き者を会員として、プロの先生を招いて毎月最終土曜日に集まりをもっているが、昭和四十四年の設立以来、一回の中止もなく継続している由である。幹事を務める方々の熱意には頭の下がる思いがする。このような伝統ある会であるから、会員の中には謡曲歴六十数年という大先輩も数人いる。声の張りにいささかの衰えはあるものの、味わい深い謡を披露されるので、大変勉強させていただいている。趣味は楽しいからやる、これが何よりである。



ずいそう